

《研究ノート》

伊藤 章博士の農村社会学(1)

——『農村社会学講義案』を中心に——

高 島 秀 樹

目 次

はじめに

1. 伊藤 章博士の略歴と業績

(1)略歴

(2)業績

2. 伊藤 章博士の農村社会学

(1)社会学的立脚点

(2)農村社会学

(3)農村社会の基礎的認識

1) 村の成立と構造

2) 村の中の社会集団

3) 生活過程

4) 農村社会の文化

(4)農村社会の変動への視点

3. 農村社会学史上の位置づけ (以上 本稿)

4. 伊藤 章博士の農村地域社会変動論 (以下 次稿 詳細目次略)

おわりに

はじめに

日本の農村社会学の歴史についての研究によれば、アメリカを中心とする海外の農村社会学理論の導入とその日本の現実への適用による研究の時期をこえて、日本の農村地域社会の実態に立脚した独自の理論体系を持つ農村社会学が確立されたのは1930年代後半からであって、それを象徴する研究業績は鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』(1940(昭和15)年)¹⁾と有賀喜左衛門の『日本家族制度と小作制度』(1943(昭和18)年)²⁾であるとされる³⁾。この研究ノートは、

この日本の農村社会学確立の時期に自らも講義と著作を通して農村社会学の体系を提示することを試み、その後の長い研究活動を通して、その体系の完成に努めるとともに、第二次世界大戦後の日本の農村地域社会の変動過程の実態をふまえた農村地域社会の変動理論の提示を志向した、伊藤章博士の農村社会学について明らかにすることを目的とする。さらに、それを通して伊藤博士の研究の日本の農村地域社会研究史上の位置づけを明らかにするとともに、日本の農村地域社会研究史の研究に対して、1940年代に日本と中国の農村地域社会の実態を取り入れ

た農村社会学の体系を提示しようとする試みがあったという新しい一つの事実を提示することを目指している。

この目的を達成するために、本稿では伊藤博士のきわめて多量にのぼる研究業績の中から、初めに最も初期の業績に当たる『農村社會學講義案』(1943(昭和18)年、國立北京大學農學院農業經濟學系 刊)⁴⁾を素材として、伊藤博士が提示しようとした農村社会学の体系の原型を明らかにし、さらに『農村社会学』(1977(昭和52)年、めいせい出版 刊)⁵⁾を素材として戦後農村地域社会の変動についての認識と、それを基礎として伊藤博士が提示しようとした農村地域社会の変動理論を明らかにすることを試みるが、紙数の制約から今回はその前半、農村社会学の体系の原型を明らかにすることを課題とする。

1. 伊藤 章博士の略歴と業績

(1) 略歴

伊藤博士の詳細な経歴については注に示した「年譜」⁶⁾に譲るが、ここではその農村社会学の形成に関連すると考えられる主要な点についてのみ触れておきたい。

伊藤博士は1934(昭和9)年4月に東京帝国大学文学部社会学科に入学し、社会学を学び、1937(昭和12)年3月に卒業した⁷⁾。しかし、文学部社会学科での学習だけでは日本の農村地域社会の実態を十分にとらえられないと考え、卒業後農学部農業経済学科に学士入学し、1940(昭和15)年に「農村社会学の存在理由」に関する卒業論文を作成して卒業した。それ故後年、1962(昭和37)年に農学博士の学位を得ている。文学部社会学科において社会学を専攻し、農学部農業経済学科において農業経済学を専攻したことは、伊藤博士の農村社会学の一つの特徴を形成することとなったのであって、伊藤博士は

後年しばしば社会学的視点のみで農村地域社会を把握しようとする、そのありかたに強い影響力を持つ経済的要因についての認識が不足しがちであると発言されていたが、こうした発言に象徴されるように、経済的要因・経済的側面についての正しい認識をあわせ持った農村社会学が志向されたと考えられる。

伊藤博士は大学卒業後ただちに、1940(昭和15)年8月に国立北京大学農学院助教⁸⁾として赴任、1942(昭和17)年に副教授(助教授に相当)に昇格、1945(昭和20)年の第二次世界大戦の敗戦までその職にあって、5年間を中国北京に過ごした。この体験は、『農村社會學講義案』の内容に見られるように、その農村社会学の体系を形成するにあたって日本の農村地域社会の実態とともに中国の農村地域社会の実態を素材として取り入れるという結果を生んだ。これも伊藤博士の農村社会学の一つの特徴となる点であったが、残念ながら日本に引き揚げ、その後長く中国農村地域社会の現地研究が不可能であった事情から、中国農村地域社会の研究は十分に展開されえなかったと考えざるをえない。

第二次世界大戦後は、農林省農業技術研究所(土地経済研究室、土地利用研究室など)に在職して、土地利用、特に土地改良の経済効果を中心とする研究に従事、それと関連して広く調査を基礎として日本各地の農村地域社会の実態についての知見を蓄積された。中でも、1956(昭和31)年から1959(昭和34)年の3年間、アジア財団による岡山県吉備郡高松町新庄上新池における農業機械化に関する大規模な総合的研究に神谷慶治東大教授を責任者とする農業経済班の研究委員として参加したことは、岡田謙東京教育大学教授を責任者とする社会学班や歴史班、地理班との共同研究を通して日本の農村地域社会について総合的な研究の必要性を認識させるとともに、実際にその総合的な認識を深め

させるものであったと推測される。一方、農林省農業技術研究所在職中の1954（昭和29）年4月から、東京大学農学部において農村社会学の講義を担当したが、その講義を通して農村社会学の体系化が計られたと推測される。その後1967（昭和42）年4月から明星大学人文学部社会学科教授として着任、1981（昭和56）年9月に在職のまま没するまで学部・大学院において農村社会学を中心とする講義など教育活動に従事するとともに、日本各地の農村地域社会において多様なテーマについての調査研究活動を展開していた。

(2) 業績

伊藤博士の業績はきわめて多方面に及んでおり、その代表的な研究業績については注に示した「著作目録（抄）」⁹⁾を参照されたいが、その業績は大別すれば、農業経済学的研究と農村社会学的研究に二分される。

農業経済学的研究の中では、1. 土地改良の経済効果、2. 農業水利の整備や合理化の経済効果、を中心に、3. 土地利用と養蚕業、4. 農場整備・農地基盤整備などの経済効果、5. 農業機械化の経済的影響、6. 協業、などのテーマが研究されている。

農村社会学的研究の中では、1. 「習俗社会」の概念をもって日本の農村地域社会の本質を明らかにしようとするを中心として、農村地域社会と農民の基礎的な姿を明らかにする研究、2. 農村地域社会の変貌を明らかにする研究、を中心に、3. 山村地域社会の過疎や高齢化を含む変動過程、4. 自然環境保全、5. 大規模宅地開発と農村地域社会の関係、6. 都市と農村の一体化過程、などのテーマが研究されている。

2. 伊藤 章博士の農村社会学

今日、農村社会学は一般に「農村社会や農民生活を対象とする社会学の一分野。」とされるが、その研究対象の多様性から「アメリカ、西欧諸国、日本、第三世界の諸国などそれぞれの農業や農村の状況が多分に相違することもある、多様な出発をしながら、それぞれの地域での研究を展開させてきている。」¹⁰⁾という事情もあって、農村社会学をいかなるものとするかは、各国によって、また各研究者によって異なっている点がある。この点に関しては、「農村社会学は、農村人および彼らの社会関係ならびに文化の研究を任務とする。つまり農村生活の社会学である。」と農村社会学を規定した上で、「しかしそれは、あくまでも農村という地域社会に基礎をもった生活、ないし人間集団の集合形態（kollektive Gebilde）を取り扱うのであるから、その学問的性格を規定する鍵は、農村とは何かという点にまず求められねばならない。したがってまた、国による農村自体の存在形態の違いは、異なった姿の農村社会学を形づくっている。」¹¹⁾という指摘もある。これらの指摘から「農村社会学」について明らかにするには、第1に、その研究対象をどのように設定し、その特質をどのようなものとして把握し、それに対応して農村社会学をどのように規定しているかを明らかにしなければならないという点が導き出される。

一方、「農村社会学は、出発点においては必ずしも既存の社会学から分化したものではなく、あとから特殊社会学として全体の学問体系的なかに組み入れられるという形で発展してきた分野である。」という事情が存在したとしても、アメリカにおいて農村問題の解決のために「…（略）…農業経済学が持たなかった場を農村社会学が担うことになり、…（略）…各方面の研

究が始まった。」¹²⁾という指摘からも考えられるように、その研究の方法として社会学を用いるという点に農業・農村・農民を対象とする諸科学の中における農村社会学の独自の存在意義があるのであって、ここからその方法論的基礎となる社会学をどのようなものとしてとらえているのかを明らかにすることが、その「農村社会学」について明らかにする上で第2に明らかにすべき点として導き出される。

これらの点を前提として、ここでは伊藤博士の農村社会学について、1. その農村社会学の方法論的基礎となる社会学と、2. その目的、対象、方法についての規定を基礎として含む農村社会学の概念規定の2点を明らかにすることを出発点として、さらに、その研究対象の認識を具体的に明らかにするために、3. 村の成立と構造、4. 村の中の社会集団（家族、血縁集団、地縁集団、行政的集団、文化的集団、経済的集団、特殊共同利害集団、など）5. 生活過程と、それに関連して村をこえる社会関係、6. 農村社会の文化、といった点について考察し、それに付け加えて次の考察内容との関連の下に、この時点で示された限りにおいての7. 農村地域社会の変動への視点を明らかにしておきたい。

(1) 社会学的立脚点

ドイツにおけるL. von Wieseの村落社会学 (Soziologie des Dorfes) などヨーロッパにおいても農村社会学の伝統は存在していたが、世界各国の中で農村社会学の発達の中心となったのはアメリカであったといつて良い。このアメリカにおいては、農村社会学には大別して二つの流れがあり、その各々がその基礎として独自の社会学的な立脚点を持っていたととらえられる。その1は、J. M. Gillette (1866～1949) に代表される実践的な志向を持った農村社会学で

あって、農業政策や農業問題・農村問題の解決策の基礎として農村地域社会を取り上げ、その実態を研究するものとして農村社会学を考えようとするものであって、この学派は社会学としては総合社会学に依拠していると考えられる。その2は、E. D. Sanderson (1878～1944) に代表される科学研究を目指す農村社会学であって、直接農村問題の改善に寄与することを目指すものではなくて、農村地域社会に対して社会学の原理を適用して科学的な研究をしていこうとするものであって、この学派は社会学としては形式社会学に依拠していると考えられる¹³⁾。こうした先行するアメリカでの状況について十分認識した上で、伊藤博士は農村社会学の基礎となる社会学について次のように把握して、説明している。

伊藤博士は社会学について「社会学は社会に関する学問である。人間の社会生活を取り扱う科学は種々存在するが、社会学は他の科学と異なる特殊の観点から社会生活を分析しその分析されたる社会生活の一定の内容に就き学的取扱いをなさんとするのである。それは社会生活を特定の方面に抽象しそれに普遍的概念構成をな^(ママ)さるとする科学である」¹⁴⁾として、それがA. Comte (1798～1857) によって始められたとしている。その社会学は総合社会学、歴史哲学的社会学としての特徴を持つものであったが、それに対して「さて社会生活が現実的には諸相の総合的全体であり、社会が各部分現象の有機的全体であるにしても、此の全体を総合的に考察することのみによって、果して社会学なる科学が成立するであらうか。」「又、社会生活の歴史的変遷に就て其の一般的傾向を求め之によつて社会の変動を説明せんとすることは、歴史哲学の問題ではなからうか。」と疑問を呈し、「之等の疑問から出発して、十九世紀末の複雑なる現実社会中の現象から、純社会的なるものを抽象

し、茲に社会学に特有なる研究対象を求めようとする学者が現れた。」¹⁵⁾として、特殊社会学としての社会学、形式社会学について、その代表的な研究者としてのG. Simmel (1858~1918)を例として紹介している。G. Simmelの社会学は「… (略) …結社形式のみを抽象して、之を唯一の研究対象とする社会学… (略) …」であり、「彼は社会に固有なるものを心的相互作用なる形式に求め、此の形式として抽象せられるものを研究対象とする事に於て、結社形式の学即ち社会学が樹立せられるとなした。」¹⁶⁾と説明している。これらの記述から理解されるように伊藤博士自身は、G. Simmelの形式社会学を自らの社会学的立脚点としていたと考えられる¹⁷⁾。

しかし、形式社会学の高度の抽象性は社会学の研究を非現実性を帯び、非生産的なものとする危険性をはらんでいることを考慮し、「私の考えでは… (略) …単に社会関係の形式ということのみでなく、もっと広い範囲に亘って研究の領域を拡張し、人間の現実生活そのものを観察の対象としなければならない。しかもあく迄も研究の中心は現代の社会生活におかれねばならないと考えられる。」と自らの考えを明らかにし、さらに「かかる社会学の現実化を求めんとする傾向は、例えば米国における都市社会学、農村社会学の発展であるとか独逸に於ける文化社会学の勃興、日本に於ける具体的な農村社会調査等にうかがわれるのである。」¹⁸⁾と、社会学の現実化を望ましい方向と考え、それが農村地域社会の研究において実現しつつある状況、そしてそこにそのさらなる展開の可能性が存在しているという考えを提示しており、別の箇所では「社会学の現実化に伴い発生せる諸傾向の中の我々の問題は農村社会学なる新学問である。」¹⁹⁾としていることも合わせて考えるならば、伊藤博士の農村社会学研究の社会学的立脚点は社会学の現実化傾向の中にあることが明らかであ

る。

また、社会学の研究対象については、「社会学は人間現象中特に社会的な事実、現象を題材として研究するのであり、かゝる社会事象は社会集団、社会過程及び社会形象等の諸方面に分れる… (略) …」とされ、その説明までを含めて、「社会学は社会集団、社会過程及び社会形象等の人間間の関係事象を批判論理的に認識する所の实在科学である。」と定義される。ここで社会学の研究対象とされる社会集団、社会過程、社会形象については、その研究内容が具体的に次のように説明されている。社会集団については「… (略) …人々が如何にして団結状態を実現しているか、又集団は如何にして発生し、その結果は如何と云うような諸事実を課題とする。」、社会過程については「… (略) …社会生活の過程を研究するのである。茲では社会関係や社会的行為が取扱われる。」、社会形象については「… (略) …社会意識、社会組織、社会制度等の文化形象が研究せられる。」²⁰⁾とされる。

このような社会学の定義、その主要な研究対象としての社会集団、社会過程、社会形象についての考え方が、農村社会学の定義と研究にどのように反映されているかを考察していくことが次の課題となる。

(2) 農村社会学

伊藤博士は農村社会学の研究がアメリカを中心として進展してきた事実から、その農村社会学について説明することをアメリカにおける農村社会学研究の実態を示すことから始めている。そこで「さて米国の農村社会学は農村共同社会の研究の出現を見た一九二五年頃を中心として二期に分たれる。」として、(1)実際問題考究の時代、(2)研究方法考察の時代、の2期に分けられることを示している²¹⁾。その内、初期の実際問題考究の時代における「農村社会学は、農

村生活が正調を欠いて来た時に生まれたのである。」と指摘し、その研究内容は「… (略) …総合的な農村生活の研究であって、丁度初期の社会学と同様であった。」²²⁾とされる。第2の研究
方法考察の時代は、特殊科学としての農村社会学が生じてきた時期であって、農村社会学が科学として存在するための要件としてMelvinの
説を引用して次の4点をあげている。

1. 其の研究に於て一定の手順を踏む事。… (略) …
2. 研究領域の限定。農村社会学は農村社会特有の諸集団、制度、機関の形式及び機能を取扱う。
3. 農村社会学に於ける研究方法が若し科学的地位を得るには客観的現象の研究をあくまでも固守することが根本的に必要である。… (略) …
4. 応用を考慮外に置く事。²³⁾

社会学についての考え方を基礎として、アメリカの農村社会学についての考察、説明を加えて伊藤博士の農村社会学の目的を考えるならば、農村社会学は社会学の一部門として、農村地域社会の科学的な研究を目的とすべきものであるという考え方が採用されていたと考えられる。

このような目的を持つ農村社会学の研究対象については、先の社会学、特に形式社会学の研究対象について明らかにした内容と共通していると考えられる。研究対象について明らかにするに先だって、伊藤博士は農村そのものについて、那須皓、J. M. Gillette、鈴木栄太郎3氏の先行研究を参照して、「… (略) …農村と云われているものは決して単なる地域を指すのみではないことを知る。即ち単なる農村地域 (私はこれを農民結合と理解し農村集団と名付けるのであるが) を指す以外に、かゝる地域の上に行わ^(マア)れる農民の生活と農民の生活が永続している結果

として作り上げられた社会意識、制度等が含まれているのである。」²⁴⁾としている。そして「さて農村社会学はこの村を中心とせる農村地域の人間生活を研究するものである。」として、より具体的に「… (略) …農村社会学の対象は農村に於ける人間関係の事実、現象即ち社会事象である。そして農村に於ける社会事象は大体農村集団、農村の生活過程、農村の社会形象の三方面に分けることが出来る。」²⁵⁾とその研究対象を説明している。

これらの研究対象について研究する方法については、「この三者は現実には相互関連的に理解されねばならないのであるが^カ、科学的には分析して考えねばならない。」²⁶⁾と、相互関連的認識、総合的認識を最終的に志向するとしても、分析的な研究が基礎、もしくは出発点として必要であること、すなわち、科学的な研究全体に共通する基礎的な研究態度としての分析的研究の必要性が指摘されている。また、その研究は「然もそれは単に抽象的理論的研究に止ってはならぬ。否抽象的理論的研究であるにしても、それは現実の材料から帰納した理論でなければならぬ。」²⁷⁾と現実を解明し、そこに基礎を持つ理論形成をめざすという研究方法を取るべきことが強調されている。これは日本や欧米の材料のみでなく、中国農村生活の現実の材料を集めなければならないという具体的な提言に結びつくのであり、さらに、この著書の中で「農村社会調査」について独立した1章をあてて説明し、その中で「農村社会学が現実の農村社会生活に即した、即ち現実の生活を見捨けない科学的学問になる為には、農村社会調査の活動に依らなければならない。」²⁸⁾というように、社会調査を研究方法として採用すべきとの主張と結びつくのである。

以上の説明から、伊藤博士の構想した農村社会学の目的、対象、方法を含めた概念について

理解することができよう。

(3) 農村社会の基礎的認識

農村社会学のあり方がその研究対象である農村地域社会の実態に規定されていることから、次に伊藤博士が農村社会学の主要な研究対象についてどのように認識していたかを明らかにする。農村社会学の研究対象として最も基礎にある農村そのものについては先に明らかにしたので、その点に関しては若干の補足的な考察・説明にとどめ、ここではより具体的な研究対象について、伊藤博士が農村社会学の具体的対象について整理して示した図式にしたがって、社会集団、社会過程（具体的には社会生活の過程ととらえられ、さらに社会関係が含まれる）、社会形象（具体的には文化形象ととらえられる）の3点から考察していくこととする。

1) 村の成立と構造

村は最も基本的には「地縁集団」であって、「即ち基本的には、一定の地域へ人間（家族）の羣居せる姿である。」ととらえられ、その上で「…（略）…一定の地域に集まっていることから、人間相互の接触が頻繁となり、互に慣れ親しみ、信頼を伴う相識の関係が生れ、村が成立する。従って共同労働、共同管理、共同享樂等が行われるようになり、地縁関係は近隣関係と呼ばれてもよい」と、村の地域社会としての成立の最も基礎的な点が説明されている。さらに農村地域社会はそこに居住し、生活する住民の多くが農業を職業とするところから、「特にそこ生活する人間の主要職業が農業である」という条件が加って労働様式、生活様式の類似と云うことが附随する。地縁集団に共通な土地への共属意識と云うものは、その住民が農民である場合に、その職業の性質を通して一層強化される。」²⁹⁾という、他の地域社会と比較しての特徴が説明さ

れている。

この農村地域社会における紐帯——それは農村地域社会成立の根拠となる要因とも理解される——については次のように整理して示される。

基本的な紐帯

1. 地縁的羣居即ち近隣関係
2. 農業生産を基礎とせる労働様式の類似。

従って土地への共属意識

絶対的条件ではないが、無視することのできない関係

1. 古き農村社会では、一般に血縁が重なる。
…（略）…
2. 職業並に生活様式等が同一なるが故に各人の利害が一致する。そして対外的な協働が発生している。…（略）…
3. …（略）…一般に舊い農村社会では、支配関係が加わっていることが多い。…
（略）…³⁰⁾

そしてさらに具体的な村の成立について、自然的、社会的、経済的諸条件によって、村がどのような地域に成立するか、またどのような形で群居が行なわれるかについて、代表的な例として「密居村」と「散居村」をあげて説明している³¹⁾。

これらの説明を通して、伊藤博士が村の本質に関わるもととらえられる、村の成立の根拠をどのように理解していたかが明らかになったと考えられる。

2) 村の中の社会集団

伊藤博士は「農民の生活は之等の諸集団に係りつゝ、所謂農村生活を形成しているのである。従って農民生活の本拠たる村の実態をよりよく理解する為には、一步踏み込んで、此の家族集団並びに文化的、経済的、政治的な諸社会集団の形態、性格を研究しなければならない

い。」³²⁾として、初めに社会集団を取り上げる。前述の村の成立についての説明やここでの説明から理解されるように、村の内部に存在する社会集団の中で最も基礎的な存在となるのは家族であるととらえられていたことから、ここでは家族とそれに関連する血縁集団から取り上げられる。伊藤博士は家族の重要性について「殊に農村に於ける社会構成の単位が自然村と家族とであり、此の自然村内部の基本現象としては、家族が極めて重要な意義を持つのである。」³³⁾と指摘し、その上で家族については中国家族の実態に即した考察・説明を行なうこととし、経済的家族、即ち拡大された家族、家を中心として取り上げている。具体的には家族の構成について統計的な資料を基として中国家族の実態を明らかにした上で、「中国農村に於ては、大家族から小家族へ、小家族から大家族への循環が見られるのではなからうか。」³⁴⁾という周期論的な知見が示されている³⁵⁾。家族の機能については、種族保存の機能、生産消費の共同体としての機能、内的安定をあたえる機能、祖先祭祀の機能、の4点からの考察・説明がなされ、その上で中国社会においても都市においてはこれらの家族が本来持っていた機能が他の新しい機関に代替される傾向が生じ始めてはいるがまだそう顕著ではなく、農村においてはそれ以上に顕著ではないとしている³⁶⁾。

家族と深い関連を持つ社会集団として「宗族」が取り上げられ、それは「…(略)…家族はその成員を極めて少数に極めて近親者に限定するところの緊密なる集団であるが、しかし祖先祭祀の共同を通してより広き結合関係が成立する。それが宗族である。」ととらえている。そして、「祭祀・族譜」が宗族結合の直接的契機であり、「族産」が間接的契機となること、統制者としての族長の存在などを含むその構造、分裂などを含むその変動についての考察・説明がなさ

れている³⁷⁾。

家族と血縁集団以外の社会集団については「農村の各種の社会集団」として、以下の各社会集団が取り上げられている。

1. 地縁集団…自然的な集団であって、村の中により小さな、地縁関係の濃厚な群ができていている場合が多く、これは近隣集団としてとらえられる³⁸⁾。
2. 行政的集団…国家体制の整備にともない、一国内の各地方に行政的・財政的な網の目が整備されてくるのであって、旧来からの自然村を単位として利用して行政的機能を分担させることとなる³⁹⁾。
3. 文化的集団…一国の文化の発展にともなう、農村地域社会においても旧来の農村文化以外の文化的欲求が生じ、これを満足させるために文化集団が結成されるが、具体的には中国の農村地域社会では宗教団体が多い。他に国家目標への国民の動員を目指す国家意図の実現に関連する文化運動、その実現の手段としての小学校、青年団、婦人会などがあるが、中国の農村地域社会、特に華北ではこれらは微弱な存在である⁴⁰⁾。
4. 経済的集団…社会・経済が発達し、村内の経済と外部の経済の関係が密接になると、経済関係を調整する必要が生じ、各種の「合作社」が組織されてくる。それ以外にも生産技術導入のための組織(日本の「農会」のような組織)、移民あるいは出稼ぎのための一時的組織、消費生活改善のための組織(例:医療組合、炊事組合、など)、などが考えられるが、いずれも中国の農村地域社会、特に華北では発達していない⁴¹⁾。

5. 特殊共同利害集団…経済的共同利害以外の利害関係に対応する社会集団をさし、その例としては、水利組合、水害予防組合、消防組合、衛生組合、自警団などがあげられる。中国、特に華北ではこれらの中で匪賊に対する自警組織が発達しており、また地域によっては水害予防組織が発達しているところもあるが、その多くは水害の規模が大きいため国家の直接の機能となることが多いことなどが、特徴としてあげられる⁴²⁾。

これらの各種類に分けて考察・説明した上で、伊藤博士は、農村地域社会に存在する社会集団全体について、次のような発展傾向が顕著に存在しているという、まとめを示している。

第一に、⁽⁷⁷⁾ 舊来の血縁的または縁地自然集団は、その複雑なる機能の一部を分離して行き、別にその特殊機能を営むべき目的集団が発達して行く傾向である。… (略) …

第二に農村に於ける凡ゆる社会集団は、国家的な指導統制の下に置かれる傾向が近時非常に強くなって来た。… (略) …⁴³⁾

以上の考察から理解されるように、伊藤博士は農村地域社会の内部構造を明らかにする上での社会集団の存在状況の解明の重要性を認識し、それに基づいて、それを6種に整理して把握することをめざし、素材となった中国農村地域社会における社会集団の実態を取り入れて考察・説明している。こうした社会集団の重要性の認識、類型化の試みなどは、先にあげたこの時期の日本の農村社会学の大きな成果である鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』の内容⁴⁴⁾と共通するものであって、その意味において、さらにそれが鈴木栄太郎の日本の農村地域社会を素材とする考察・説明に対して、中国の農村地域社会を素材とするという意味において、大きな

意義を持つ研究であったと評価することができる。

3) 生活過程

伊藤博士は前述のように、村の社会過程については社会集団が人間の社会生活過程の展開する舞台として重要であるとした上で、この舞台の上で営まれる社会生活の過程が研究されなければならないこと、そしてさらに社会関係や社会的行為が明らかにされなければならないことを指摘している。この考えに基づいて、社会過程について考察・説明するとしても、社会集団については既に取り上げられているところから、ここでは初めに生活過程が一つの重要な焦点として取り上げられることになる。

農村地域社会における生活については前提的に、農村民の生活は外界に対して一定の封鎖性を持っており、農村集団及び農村内部の集団を地盤とし、それを中心として行なわれていると把握される。その当時の政治的変動、交通通信の技術・機関の発達、資本主義の発展が農村地域社会の開放を促進しつつあることは事実であるとしても、中国、特に華北においては、この開放は農村地域社会の生活の特定の面においてのみ、それも限られた限度の中でのみ行なわれているにすぎないと把握されている⁴⁵⁾。このような基本的な認識の上で、農村地域社会における農村民の生活過程は次のような特徴があると示される。

1. 季節性…農村民の主要部分は農業生産労働に従事していることから、農村地域社会の全生活過程は農業的季節にしたがって配置されている。これにともなう、1. 農村地域社会の労働力の季節的流動、2. 繁閑期の労働力の利用・補充、3. 労働力の季節的移動にともなう村落の解放、といった問題が

生ずること、農業労働において季節性が生ずるのはそれが自然に依存していること、さらにそれは農村生活の保守性や農民の間に「共同的運命論」が存在する傾向と結びつくことを指摘している⁴⁶⁾。

2. 未分化性…農村地域社会における生活の各種の面は都市のように分化しておらず、統合的に営まれている。「廟會・集市」が例として取り上げられるが、その中で「廟會」は本来は宗教的な行事であったが、現実には農村地域社会の宗教的、社交的、娯乐的、経済的諸行事を兼ね統合したものとして発達している。また、農民の衣食住の消費生活において自給性が強いことが示される⁴⁷⁾。

3. 封鎖性…他村人の入村の困難、入村者に対する苛酷な蔑視から、農村地域社会に封鎖性が存在するととらえられる。日本の農村地域社会においては「村入り」「氏子入り」「株入り」の慣行があるのに対して、中国、華北の農村地域社会では同じような厳密な規定はないが、外来者に対する封鎖性は存在していることが外来者の土地取得の困難性などから明らかである。また、農村地域社会相互の隔離・対立、封鎖性の発生原因についても説明される⁴⁸⁾。

4. 等質性…農村地域社会における農民相互の接触は生活の全領域に及び、頻繁に反復されるところから、各人の行為が相互に規定しあい、影響しあって、村民間の等質性が助長される。しかし、これは逆にいえば個性の欠如を意味する。また農村地域社会における生活過程は全人格的である⁴⁹⁾。

このように農村地域社会における生活過程の特徴を明らかにした上で、さらにこうした生活過程の特徴が社会意識（村意識）の生成、作用と相互関係を持つことが指摘される。そこでは「社会意識は諸個人の心的相互作用の所産であり、生活過程の凝結したものである。そして、社会意識は一度出来上がると、我々の社会生活に対して極めて強い拘束力を持つ。」⁵⁰⁾と把握され、社会意識が強い拘束力を持つのは「役割の交換 (Rollen Wechsel)」を通してであり、さらに社会意識が社会制度・慣習と深い関連を持つことが指摘される。なお、社会意識、制度、慣習などの作用は農村生活にとってきわめて重要なものであると考えられることから、独立した1章（第8章）をあて、別の角度から改めて説明している⁵¹⁾。

社会過程に含まれる社会関係については、ここでは「村をこえる社会関係」について、特に1章（第7章）を当てて、考察・説明されている。中国、華北の農村地域社会が封鎖性を持つことを「十里之外風俗不同」という諺をひいて説明した上で、しかしながら現実には近隣の農村地域社会の間で社会的、経済的な関係があることを指摘し、その農村地域社会を超出する社会関係が累積する地域として「市場圏」と「通婚圏」が取り上げられている。市場圏については、中国、華北において「集市」が農民の経済生活、社会生活の拠り所として重要性を持つこと、その開催場所、開催日が一定していることが説明される。また、通婚圏については調査結果を基としてその実態が地域的範囲や農家経営規模との関連から説明される⁵²⁾。

4) 農村社会の文化

農村社会学の具体的な研究対象の第3は社会形象であって、そこではより実際的には、社会意識、社会組織、社会制度などの文化形象が研

究されなければならないとされる。この考え方を基礎として、ここでは次に農村文化が取り上げられる。

ここでは初めに「文化」を社会意識、慣習などを内容とする社会形象 (Soziale Gebilde) と同じ意味・内容を持つものとしてとらえること、そして農村文化にも村意識と呼ばれるような内面的思考様式と、慣習、制度のような外面的行動様式が存在していること、また文化は個人に対して「社会的拘束性」を持つこと、そして農村においては自然環境とならんで社会意識、慣習などが農村生活に大きな影響を与えていること (それは中国、特に華北においても同様である) などが指摘され⁵³⁾、その上で農村文化の特質として次のような点があげられる。

1. 自然的・精神的…都会文化が人工的・物質的であるのに対して、農村の生活は自然と融合しているためにその文化も自然が主役であり、家の生活、神への信仰、村民間の和楽交歓を重視するなど精神的、内面的である。
2. 伝統保存…都会文化が新奇な発明、創作を主とするのに対して、農村文化の重点は伝統保存にある。古い生活態度を守るものが尊重され、村発生以来永続する文化が伝統としての強みを持ち、迷信が栄え、老人が権威を持つ。
3. 生産的…都会文化が消費的、享乐的であるのに対して、生産的であり、農業と密接に結びついている。それは農村地域社会においては仕事と休養、いいかえると生産、勤労と消費、享楽が判然と分かれていないこととも関連する⁵⁴⁾。

このように農村地域社会の文化の特質について明らかにした上で、これと関連して農村地域社会における社会施設について合わせて考察・

説明している。そこでは第一に農村地域社会においては社会施設がきわめて乏しい現状が説明され、保健的施設、教育施設、娯楽施設について具体的に説明されるが、そうした乏しいという実態の基礎には経済的な基礎が不十分であるという事実が存在することが指摘される⁵⁵⁾。

(4) 農村社会の変動への視点

以上では伊藤博士が農村社会学の対象として設定した事象についてどのように考察・説明しているかを各項目ごとに示してきたが、ここですれに加えて、農村地域社会の変動について、この書で触れられている限りにおいて明らかにしておきたい。こうした点を取り上げるのは、伊藤博士は後に、第二次世界大戦後の日本の農村地域社会の変動をふまえて農村地域社会の変動について研究していくのであり、その点については本稿の後半で考察を加えるが、その前提として、原初形態ともいうべきものとして、この時期の著作の中でどのように示されているかを明らかにしておきたいと考えるからである。

伊藤博士は中国、華北の農村地域社会に限らない、東洋諸国の農村地域社会に共通する村落発展の傾向として次の諸傾向を示している。

1. 血縁的村落から地縁的村落へ…農村地域社会の文化的、経済的な発展にともなう住民の移住現象が生じ、血縁村落を解体していく傾向を生む。
2. 自然村から機能村へ…自然発生的な社会的統一である自然村から、国家の行政機能を分担する行政的村落へ、その性格を変えていく傾向がある。
3. 機能村の分解…機能村化が進展し、それによって農民の個人主義的、自由主義的傾向が強まると、ついには地域的連帯性が無視され、経済合理性に基づく各種の社会関係を設立させるよう

になり、村は単なる地域集団か、せいぜい特殊な機能を持った集団としてのみ残存し、旧来村が持っていた各種の結合や機能は分化して、大小の集団に移行していく⁵⁶⁾。

こうした伊藤博士が提示した農村地域社会の変動についての基礎的な図式は、その後の農村地域社会の変動の方向として実現していったのであろうか、またその後の研究の中に残存し、有効性を保ちえたのであろうか、といった点について検討すべきことが残されるが、それらについては次稿の課題としておく。

3. 農村社会学史上の位置づけ

以上の検討から理解できた点を中心として、伊藤博士の農村社会学の特徴と、農村社会学の歴史の上での位置づけについて考察するならば、次のような点が指摘できる。

1. 農村社会学としての特徴については次のように考えられる。

1-1. 今日の農村社会学の歴史についての研究は、農村社会学がアメリカにおいて出発・成立した時期から、社会的には総合社会学に立脚し農村地域社会の現実問題の解明・解決への志向を強く持った流れと、社会的には形式社会学に立脚し農村地域社会の科学的解明を目指す流れとの大別して二つの流れがあり、日本においてもそれと同様な傾向があったとことを明らかにしている。伊藤博士の農村社会学はこの図式にしたがえば、形式社会学に立脚し、その限りにおいて農村地域社会の科学的な解明を目指したものと位置づけられる。

1-2. しかし、伊藤博士の農村社会学はそれのみにとどまらず、形式社会学が非生産性に陥る危険性を持つことも十分に認識し、それに対処しようとする意図もあって、農村社会

学の現実化、いいかえると研究対象としての農村地域社会の現実に立脚した農村社会学理論の形成をめざしていた。

2. 農村社会学の歴史上の位置づけについては次のように考えられる。

2-1. 日本の農村社会学はアメリカの農村社会学の理論を導入し、それを適用して日本の農村地域社会を解明しようとする時期をこえて、1930年代後半から日本の農村地域社会の実態、実証的調査研究の成果に立脚する理論の形成がなされるようになって、真に確立されたものととらえられる。

2-2. 伊藤博士の農村社会学はまさにこの時期にあって、日本の農村地域社会の実態についての知見を基礎とするとともに、さらにそれに加えて在職・在住した中国の農村地域社会の実態に立脚した農村社会学の体系を志向した点において、この時期の農村社会学確立の動きの一部に位置づけられる。

3. 中国の農村地域社会研究への志向に関しては次の点が指摘される。

3-1. 福武直の日本の社会学史についての研究によれば、第二次世界大戦は日本の社会学の研究にとってはマイナスの条件として作用したが、「そして、戦争中の唯一の収穫といえ、少数の社会学者が、占領地域に出かけて、東亜の社会を実見し或は調査して、その成果を戦後において公刊した位であったといえよう。」として、清水盛光『中国郷村社会論』1951年、牧野巽『近代中国家族研究』1949年、林恵海『中支江南農村社会制度研究』(上) 1953年、福武直『中国農村社会の構造』1946年、大山彦一『中国人の家族制度の研究』1957年、をあげている⁵⁷⁾。

3-2. 伊藤博士の『農村社会学講義案』には中国農村地域社会の実態の解明の志向が十分に存在していたのであり、それ以外にも実証

的な調査研究を行っていたことも明らかである。これが後年体系化され、公刊されれば、上述の諸研究に列する成果となったのではないかと考えられる。しかし、現実にはこれらの研究が体系化され、発表されるまでに至らなかった点が、残念ながら指摘される⁵⁰⁾。

今日、中国、日本両国をはじめとする社会学者の中国社会、中国農村地域社会の研究が再び始まっているが、こうした時期においてこそ伊藤博士の中国農村地域社会の研究について再検討することが必要と考えられる。

(1993年11月・以下続稿予定)

〔注〕

- 1) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』、1940年
- 2) 有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度』、1943年
- 3) 日本における農村社会学の確立に関しては、下記の諸研究参照。

蓮見音彦「日本農村社会学小史(1)ー農村社会学の先駆的研究ー」(東京学芸大学紀要第19集 第3部門(社会科学)、1967年、所収) 46頁
(なお、そこで引用されている諸研究について参照してもほぼ同じ見解が示されている。)

塚本哲人「序 『いえ』『むら』研究の軌跡」(塚本哲人編著『現代農村における「いえ」と「むら』』、1992年、所収) 11～25頁(特に、一 「いえ」「むら」研究成立にかかわる二つの苗床、二 鈴木栄太郎、三 有賀喜左衛門、参照)

細谷昂「第1章 『現代』と日本農村社会学」(細谷昂・小林一穂・秋葉節夫・中島信博・伊藤勇著『農民生活における個と集団』、1993年、所収) 22～35頁(特に、第二節 日本農村社会学の成立、参照)

- 4) 伊藤章『農村社會學講義案』、1943年
なお、本書の目次は次の通りである。
副教授 伊藤 章 述 『農村社會學講義案』

1943(昭和18・民國32)年3月

國立北京大學農學院農業經濟學系 刊

〔目次〕

序論	1
第1章 社会学の成立とその発展	4
第1節 緒論	4
第2節 コントの社会学	7
第3節 ジュメル社会学	14
第4節 社会学の現実化運動	17
第5節 社会学の対象	21
第2章 農村社会学の成立とその発展	23
第1節 米国農村社会学の概観	23
第2節 農村社会調査	30
第3節 農村社会学の対象	35
第3章 村の成立とその構造	39
第1節 村の成立	39
第2節 成員の属性と社会構成	42
第3節 村を成立せしめる基本的な関係	55
第4節 村の成立の具体的な型	56
第4章 農村家族	58
第1節 家族の構成	60
第2節 家族の機能	64
第3節 宗族	67
第5章 農村の社会集団	71
第1節 家族並に血縁集団	71
第2節 地縁集団	71
第3節 行政的集団	72
第4節 文化的集団	74
第5節 経済的集団	75
第6節 特殊共同利害集団	76
結語	78
第6章 農村の生活過程	79
第1節 季節性	79
第2節 未分化性	82
第3節 封鎖性	83
第4節 等質性	84
第5節 生活過程と社会意識との相互関係	86

- | | | |
|--|-----|--|
| 第7章 市場圏と通婚圏 | 88 | 同期卒業は、阿閉吉男、那須宗一、野久尾徳美、 |
| 第1節 市場圏 | 88 | 細野武雄などを含め、23名であった。 |
| 第2節 通婚圏 | 90 | 8) 助教とは伊藤博士の言によれば助手と講師、も |
| 第8章 農村の文化 | 94 | しくは助手と助教授を兼ねた職務内容に相当 |
| 第1節 農村文化の特質 | 94 | するもののようである。 |
| 第2節 農村に於ける社会施設 | 95 | 9) 著者作成の「伊藤章教授著作目録(抄)」(『明星 |
| 第9章 東洋諸国に於ける村の発展 | 97 | 大学社会学研究紀要』第2号、1982年、所収) |
| 第1節 血縁的村落から地縁的村落へ | 97 | 5～7頁を基礎として、その後判明した著作の |
| 第2節 自然村から機能村へ | 98 | 内主要なものを追加して、別掲資料2として |
| 第3節 機能村の分解 | 100 | 〔注〕末尾に掲げておく。 |
| (カタカナをひらがに改め、旧漢字を当用漢字に改めた。) | | 10) 蓮見音彦「農村社会学」(森岡清美・塩原勉・本 |
| 5) 伊藤章『農村社会学』、1977年 | | 間康平編集代表『新社会学辞典』1993年、所収) |
| 6) 著者作成の「伊藤章教授年譜」(『明星大学社会学研究紀要』第2号、1982年、所収) 4～5頁を基礎として、一部を省略したものを別掲資料1として〔注〕末尾に掲げておく。 | | 1156頁 |
| なお、本稿の考察の主要素材とした『農村社会学講義案』の成立・内容と深い関連を持つ北京大学在職中の事情については、伊藤章「北京時代の思い出」(明星大学通信教育部『めいせい』Vol.6 No.2、1972年5月号、所収) 6～9頁、参照。そこでは大学における教育・研究活動のほか、華北農村の同族結合や大家族について河北省正定県城西門外の西関村で最初の調査を行なったこと、学生の農村調査実習に関連して、河北省昌平県水屯村、同涿県城外の農村、山西省侯馬鎮、河北省唐山市近くの農村など(随筆であるため地名の表記に関して精粗がある)の調査を実施したこと、などが記されており、博士の学問的関心のあり方と中国の農村地域社会の実証的認識の進展に関連して、示唆がえられる。 | | 11) 松原治郎「農村社会学」(福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』1958年、所収) 724頁 |
| | | 12) 松原治郎、同前、724～725頁 |
| | | 13) 伊藤章『農村社会学』1977年、2～4頁 |
| | | 高島秀樹『日本の農村地域社会』1993年、28頁 |
| | | 14) 伊藤章、前掲(1943年)、4頁 |
| | | 本書の記述はカタカナ書き、旧かなづかい、旧漢字使用であるが、ここで引用する場合は印刷事情と読者の便を考慮して、記述は変更せずに、表記を全てひらがな書き、新かなづかい、当用漢字使用に改めさせていただいた。ご了解いただきたい。 |
| 7) 文学部社会学科における卒業論文の題目は「広告の社会性——新聞紙における商業広告を中心にして——」であった。(『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』1954年、87頁)。なお | | 15) 伊藤章、同前、13頁 |
| | | 16) 伊藤章、同前、15・17頁 |
| | | 17) 伊藤博士がG. Simmelに代表される形式社会学の立場を基本的に支持していたことは、大学(文学部社会学科)在学中に戸田貞三教授(1920～1947年、在職)の指導を受けたこと(戸田貞三教授が形式社会学、心的作用説に親近感を持っていたことは、例として福武直「日本社会学」(阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』1957年、所収) 429頁 参照)と関係があると推測される。またそれは、農林省農業技術研究所在職中にG. Simmelの学習会を続けていたこと |

(森住伍郎『農村社会の展開構造』1955年、395頁 参照)、明星大学在職中に社会学演習のテキストとしてG. Simmelの著作 (D. N. Levineによる英訳の論文集 *Georg Simmel On Individuality and Social Formes* 1971 Chicago U. P.、特に Sociability = Soziologie der Geselligkeit 1910などを良く取り上げていたと記憶する)をテキストとしていたことなどからも推測される。

- 18) 伊藤章、前掲 (1943年)、19～20頁
- 19) 伊藤章、同前、22頁
- 20) 伊藤章、同前、21～22頁
- 21) 伊藤章、同前、23頁
- 22) 伊藤章、同前、23～25頁
- 23) 伊藤章、同前、25～26頁
- 24) 伊藤章、同前、37頁
- 25) 伊藤章、同前、37頁
- 26) 伊藤章、同前、37頁
- 27) 伊藤章、同前、37～38頁
- 28) 伊藤章、同前、30頁
- 29) 伊藤章、同前、55頁
- 30) 伊藤章、同前、55～56頁
- 31) 伊藤章、同前、56～57頁
- 32) 伊藤章、同前、58頁
- 33) 伊藤章、同前、58頁
- 34) 伊藤章、同前、64頁
- 35) 伊藤博士が、華北農村の同族結合や大家族について関心を持ち、実証的な調査研究を進めていたことは前掲の伊藤章「北京時代の思い出」にも示されているが、これと関連する直系家族の周期研究については研究成果を鈴木栄太郎に贈られたようで、鈴木栄太郎の著作の中に「第二次世界大戦中に、北支の農業研究機関におられた確か私の後輩である伊藤章という人が、私の直系家族周期の研究に同調して、北支の中国人農家の周期的発展を図表化された報告を頂いたことを覚えている。」として、紹介されてい

る。(鈴木栄太郎「家族周期の新しい動向」1965年、『鈴木栄太郎著作集』III、1971年、所収、139頁)。

- 36) 伊藤章、前掲 (1943年)、67頁
- 37) 伊藤章、同前、68～70頁
- 38) 伊藤章、同前、71頁
- 39) 伊藤章、同前、72頁
- 40) 伊藤章、同前、74～75頁
- 41) 伊藤章、同前、75～76頁

なお、この種の機能は自然集団である村や近隣集団が担当していることも多いこと、資本主義経済の浸透との関連で必要性が増大するであろうこと、伝統的経済集団(頼母子講、看青会=1村あるいは数村で協力して組織される、収穫時期の作物の盗難を防止することを任務とする共同警備・監視の組織)について注意すべきこと、などが指摘されている。

- 42) 伊藤章、同前、77～78頁
- 43) 伊藤章、同前、78頁
- 44) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』、1940年、(鈴木栄太郎著作集I・II、1968年、所収) 322～378頁
- 45) 伊藤章、前掲 (1943年)、79頁
- 46) 伊藤章、同前、79～82頁
- 47) 伊藤章、同前、82～83頁
- 48) 伊藤章、同前、83～84頁
- 49) 伊藤章、同前、84～86頁
- 50) 伊藤章、同前、86頁
- 51) 伊藤章、同前、87頁
- 52) 伊藤章、同前、88～93頁
- 53) 伊藤章、同前、94頁
- 54) 伊藤章、同前、94～95頁
- 55) 伊藤章、同前、95～96頁

なお、「…(略)…その欠陥の救済策を諸君に課せられたる農村社会政策の問題として指摘しておく…(略)…」ことが行なわれている点に注意する必要がある。

- 56) 伊藤章、同前、97～101頁

57) 福武直、前掲 (1957年)、440～441頁

58) この点については、中国引き揚げ時に研究業績を全く持ち帰ることができなかった事情や、帰国後の職との関係もあって農業経済学的な研究に重点がおかれた事情などによるものと推察される。

【参考文献】

伊藤章『農村社会学講義案』、1943年、国立北京大学農學院農業経済学系

伊藤章『農村社会学』、1977年、めいせい出版

鈴木栄太郎『農村社会学史』、1933年、(鈴木栄太郎著作集IV、1970年、未来社、所収)

蓮見音彦『日本農村社会学小史(1)——農村社会学の先駆的研究——』(東京学芸大学紀要第19集 第3部門 (社会科学)、1967年、所収)

蓮見音彦『大正・昭和初期の『農村社会学』(1)——日本農村社会学小史(2)——』(東京学芸大学紀要第30集 第3部門 (社会科学)、1979年、所収)

蓮見音彦『大正・昭和初期の『農村社会学』(2)——日本農村社会学小史(3)——』(東京学芸大学紀要第33集 第3部門 (社会科学)、1981年、所収)

塚本哲人「序 『いえ』『むら』研究の軌跡」(塚本哲人編著『現代農村における「いえ」と「むら」』、1992年、未来社、所収)

細谷昂「第1章 『現代』と日本農村社会学」(細谷昂・小林一穂・秋葉節夫・中島信博・伊藤勇著『農民生活における個と集団』、1993年、御茶の水書房、所収)

鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』、1940年、(鈴木栄太郎著作集I・II、1968年、未来社、所収)

有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度』、1943年、(有賀喜左衛門著作集I・II、1966年、未来社、所収)

【付記】

本稿作成にあたり、あらためて著者を農村地域社会の研究に導き、大学学部・大学院在学中、さらに卒業後も、多くの講義や演習、調査研究活動を通してご指導いただいた故伊藤 章博士に対して心からの感謝の意をあらわさせていただきます。

また、このたび、故伊藤 章博士のご遺族から博士の著書論文を含む博士旧蔵の図書資料を明星大学ならびに著者に対してご寄贈賜りました。本稿の作成に際してもそれらに多くを依っているものであり、ここに記して、心からの感謝の意をあらわさせていただきます。

(たかしま ひでき、本学科教授)

【別掲資料1】

伊藤 章博士年譜

大正3年3月10日	福井県福井市東宝永町にて出生
大正15年3月	福井市立宝永尋常小学校卒業
昭和6年3月	福井県立福井中学校卒業
昭和9年3月	姫路高等学校文科乙類卒業
昭和9年4月	東京帝国大学文学部社会学科入学
昭和12年3月	同大学卒業 (文学士)
昭和12年4月	東京帝国大学農学部農業経済学科入学
昭和15年3月	同大学卒業 (農学士)
昭和15年8月	国立北京大学農学院助教

昭和17年2月 国立北京大学農学院副教授
 昭和20年12月 国立北京大学農学院副教授を退任
 昭和21年12月 農林省勤務（農地局、統計調査局、開拓研究所 等）
 昭和25年4月 農林省農業技術研究所（土地経済研究室長、土地利用研究室長 等）
 昭和29年4月 東京大学農学部講師（農村社会学担当、兼任）
 昭和36年 『日本農業機械化の分析』（共著）にて昭和35年度日経・経済図書文化賞を受賞
 昭和37年3月 東京大学より農学博士の学位を受ける
 昭和42年5月 農林省農業技術研究所（土地経済研究室長）を退任
 昭和42年5月 明星大学人文学部教授（都市農村社会学、社会学、社会学演習 等担当）
 昭和49年3月 東京大学農学部講師を停年規定により退任
 昭和55年9月 明星大学人文学部社会学科主任教授
 昭和56年9月26日 逝去、享年満67歳

付、この間東京大学農学部の他、名古屋大学文学部、千葉大学園芸学部、松山商科大学、農林省農業者大学校で講師を勤めた。

〔別掲資料2〕

伊藤 章教授著作目録（抄）

著 書・論 文 名	発表年月	発表誌名・発行所等
『農村社会学講義案』	昭和18年3月	北京大学農学院
西富士の開拓を見る（研究所から）	昭和24年10月	『開拓』昭和24年11月号
商品生産と土地利用	昭和27年2月	『農技研報告』H第3号
土地改良と土地利用	昭和27年6月	『農技研報告』H第5号
桑園の変化と土地利用	昭和29年2月	『土壤改良』第19号
桑園の衰退と日本農業の変貌	昭和29年3月	『農技研報告』H第11号
『農業投資と農業の発展』（共著）	昭和30年3月	東京大学農学部農経教室
『農業における長期投資の経済性』（共著）	昭和31年3月	農林省農地局
『農業水利の長期効果』（共著）	昭和31年3月	東京大学農学部農経教室
『土地利用より見た養蚕業に関する研究』（共著）	昭和32年9月	東京大学農学部農経教室
土地利用と養蚕業	昭和33年3月	農林省蚕糸局
桑園の衰退と畑作	昭和34年10月	『畑地かんがい』No23
土地改良の経済効果	昭和35年1月	『農業経済研究』第31巻第3号
土地利用と養蚕業	昭和35年4月	東畑精一先生還暦記念論文集『経済発展と農業問題』所収
『日本農業機械化の分析』（共著）	昭和35年6月	岡田謙・神谷慶治編、創文社
An Analysis of Agricultural Mechanization in Japan	昭和36年8月	第10回太平洋学術会議（米）発表
湿地帯における灌漑の将来(1)～(3) （Robelt L Tontz論文の翻訳）	昭和37年6月 ～10月	『畑地かんがい』No46、47、48

論評 河合悦三著『農業と農民はどうなるか』	昭和37年 9 月	『農林省図書資料月報』第13巻 9 号
農民の思想と実践	昭和38年 1 月	『基金月報』(農業共済基金) 第116号
『日本農業の方向と農場整備の問題』	昭和38年 3 月	農林省関東農政局
Benefits of Land Improvement	昭和38年 5 月	第 5 回国際かんがい排水会議(日)発表
自立と協業	昭和39年 1 月	鞍田純先生還暦記念論文集『農業の経営と農協』所収
農村社会の変貌と今後の展望	昭和39年 2 月	『農業と経済』30巻第 2 号
習俗社会	昭和39年 3 月	東畑精一・神谷慶治編『現代日本の農業と農民』所収
土地改良と土地利用	昭和39年 4 月	『近代農業』'64.4
Decline of Sericulture and Related Shifts in Japanese Dryland Field Agriculture since 1930	昭和39年 5 月	"Rural Economic Problems" Vol.11, No.1
Recent Changes in the Rural Communities in Japan and their Prospect	昭和39年 8 月	第 1 回国際農村社会学者会議(仏)論文発表
牛の育成牧場の経済性	昭和41年 8 月	『農業構造改善』4 巻第 8 号
農地基盤整備関係社会資本と水稲生産力	昭和42年 3 月	『土地改良投資配分方法に関する研究』所収
『農場整備研究の意義と問題点』	昭和42年 8 月	農林省農業技術研究所
『農山漁村集落改善調査報告』(共著)	昭和43年 6 月	建設省住宅局
未来社会について	昭和44年 3 月	『明星大学社会学科研究報告』第 1 集
静岡県駿東郡長泉町および田方郡修善寺町	昭和44年 3 月	『草地改良における入会権の解体過程(調査報告)』所収
現代社会と今後の課題	昭和44年10月	『めいせい』Vol. 3、No. 7.
レクリエーションと山村振興	昭和45年 3 月	『山村の資源開発』所収
畜産の地域間協業と山村振興	昭和46年 3 月	『山村の資源開発II』所収
農業水利合理化に関する研究	昭和46年 3 月	『農業水利合理化に関する調査研究報告』所収
『農業水利合理化作業の経済効果』(共著)	昭和46年 3 月	埼玉県農業水利課
愛知県における粗飼料流通の成立条件の実態調査	昭和46年 3 月	『大規模酪農経営における育成および粗飼料生産の分化に関する調査報告』所収
草地改良における入会権の権利調整	昭和46年 5 月	『明星大学研究紀要—人文学部』第 6 号
愛知県における販売を目的とする集団粗飼料の栽培の実態と問題点	昭和47年 3 月	『大規模酪農経営における育成および粗飼料生産の分化に関する調査報告(最終報告)』所収
畜産の地域間協業に関する研究	昭和47年12月	『明星大学研究紀要—人文学部』第 8 号
山村社会における高齢者問題	昭和48年 3 月	『山村の就業構造』所収
山村の水資源管理(1)	昭和48年 3 月	『山村の資源管理 I』所収

普通畑の土地利用変動分析(1)	昭和48年 3 月	『土地利用変動分析調査報告書』所収
首都50km圏農用地保全の実態	昭和48年 3 月	『農用地の維持保全の実態』所収
山村の水資源管理(2)	昭和49年 3 月	『山村の資源管理II』所収
『農村における土地利用のあり方に関する調査』(共編著)	昭和49年 5 月	農林大臣官房企画室
自然環境保全と山村資源の維持管理	昭和50年 3 月	『山村振興と自然環境保全』所収
豊科町農業の推移と現況	昭和51年 2 月	『豊科地区農村基盤整備調査報告書』所収
土地利用とは場整備	同上	同上
水資源の維持管理と自然環境保全	昭和51年 3 月	加藤譲編『現代日本農業の新展開』所収
観光開発と自然環境保全	昭和51年 3 月	『山村振興と自然環境保全II』所収
大規模宅地開発と農村社会	昭和51年 8 月	『大規模宅地開発にともなう農業との調整に関する調査I』所収
構造改善事業の成果と問題点	昭和52年 2 月	『農業構造改善』1977年 2 月号所収
『農村社会学』	昭和52年 9 月	めいせい出版
『峡谷型山村の産業振興と文教・生活環境整備』(共著)	昭和53年 3 月	全国農業構造改善協会
人と水と土地	昭和53年 3 月	阿閉吉男教授退官記念論文集『近代社会学の諸相』(共編) 所収
都市と農村の一体化	昭和53年 5 月	『農林図書資料月報』29巻第 5 号
『社会学』	昭和53年 5 月	めいせい出版
都市と農村の一体化過程	昭和53年 8 月	『大規模宅地開発にともなう農業との調整に関する調査II』所収
大都市の農業	昭和55年 3 月	『めいせい』vol.13, No.12.
農村と都市の一体化過程	昭和55年 3 月	『明星大学社会学科研究報告』第12集
大都市のなかの農業と農村	昭和55年 9 月	『公害の現状と回復—宅地開発と農業』所収

注：著書・論文名中『 』を付したものは単行本を表わす。

この他にも多くの論文・調査報告を執筆されているが、ここでは主要なものに限った。